

五法と三身の結び付き

——仏地経論を中心として——

佐久間 秀範

近年、漢訳文献とチベット訳文献を比較検討することにより、両者間に重大な思想的差異が見出されるようになり、旧来の考えを再検討する必要性が高まっている。『仏地経論』に関しては既に西尾京雄博士の詳しい研究があるが、改めて両訳を逐一比較対照することにより、新たに両者間に重要な差異を見出すことができる。その一つとして以下に五法と三身の関係を見ることにする。なお紙数の制約上、詳細は後日に譲り、要点のみを示すことにする。

『仏地経』は瑜伽行派の目指す悟りの境地Ⅱ仏地を清浄法界・大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の五法によって構造分析する経典で、これは『莊嚴経論』の菩提品と極めて密接な関係を持つものである。菩提品の骨子でもある三身とこれら五法との関係を関連する諸経論から引き出し表記すると下図の如くである。

a—1はチベット訳『仏地経論』(Bhavy-ṭib, P版 No. 5498, ch. 299b³)を代表とする説である。Ye šes sde ("Sams rgyas griso bohi rgya cher hgtel pa" P版 No. 5848) dPal brtsegs ("Chos kyi nam gran", P版 No. 5850, cho 310b⁷)と同説。

a—2は漢訳『莊嚴経論』(㊤三二卷六〇七上)の説である。

a—bは『莊嚴経論』の安慧釈(SAVBh. D版 No. 4034, mi.

a—1	清浄法界 大円鏡智 平等性智 妙觀察智 成所作智	法受用身 变化身
a—2	清浄法界 大円鏡智 平等性智 妙觀察智 成所作智	法受用身 变化身
a—b	清浄法界 大円鏡智 平等性智 妙觀察智 成所作智	法受用身 变化身
b—1	清浄法界 妙觀察智 成所作智	法受用身 变化身
b—2	清浄法界 大円鏡智 平等性智 妙觀察智 成所作智	法受用身 变化身
c	已転依の四智 未転依の八識	法受用身

140a⁵とH. 135b⁶以下とを総合的に判断する)の説である。

b—1は漢訳『仏地経論』(㊤二六卷三七上、三二五下—三二六上)特有の説である。

b—2は『成唯識論』(㊤三二卷五七下—五八中)『八宗綱要』に、後の法相教学の正義として示されている説である。

cは『撰大乘論』世親釈真諦訳(㊤三二卷二六七中)に示されている説である。

さて、漢訳『仏地経論』の記載(㊤二六卷三二五—三二六上)から、a—1とb—1との優劣を考える際に『莊嚴経論』と『撰大乘論』の解釈が極めて重要なポイントとなっていることが判る。

先ず『莊嚴経論』(MSA)の場合を見てみよう。MSAで三身と五法の関係を扱っているのは第九章菩提品の第六七偈から第七六偈であるが、漢訳に比べてはるかに不明確で、成所作智—变化身を除いて、この関係を積極的に確定することは難しい。この事は例えば宇井伯寿博士が『大乘莊嚴経論研究』の中で漢訳と同様、a—2

の関係を提示し、武内紹晃氏が『瑜伽行唯識学の研究』の中で a-1 の関係を提示していることからも判るであろう。

漢訳『仏地経論』の先の箇所は b 有義を主張する中で、

「莊嚴論説。大円鏡智は受用仏。摂大乘説。転諸転識得受用身。

然説転去阿頼耶識得法身者。此説転去第八識中二障種子。顯得清淨転依法身。非説鏡智。以説鏡智是受用故。」

と記している。これは a 有義を誤まりとし b 有義を正義とする根拠となる部分であるが、ここでは明らかに MSA が鏡智—受用身の

関係を示していることになる。相当部分の MSAskt. K—69 cd は

saṃhogabuddhata * jñānapratibhodyāc ca tat

であり、「そしてそれは智の影像を生ずるから受用仏である」と解釈できる。しかし、* 部分を複合語として解釈した場合には字井訳

「そして、それは受用仏と智慧との像が、それから、生ずるからである。」と漢訳に引き寄せて解釈することも不可能ではない。世親

釈の部分も同様である。因に無性釈にはこれに関する記載がない。

以上 MSA からは確定した関係が得られないと考えるのが妥当であり、世親・無性もまた明確ではなく、安慧で明示され始め、Prabhākaramitra 訳の『莊嚴経論』、戒賢の『仏地経論』、玄奘訳の『仏地経論』でそれぞれ明示される様になったと考えられる。

さて、先に『仏地経論』の原文を示した中の『摂大乘論』の説から阿頼耶識→法身の関係が得られることが判る。a 有義でこれと阿頼耶識→大円鏡智の関係を合わせて大円鏡智—法身の関係を導びいているのに対して、b 有義の正統性を主張するために先の文が示されているのである。ここで『摂大乘論』の諸本を比較すると世親釈真諦訳(㊤三二卷二六七中)を除いて、すべて先の関係を示

五法と三身の結び付き(佐久間)

している(世親釈玄奘訳㊤三二卷三七八下、同 Tib 訳 D 類 No. 4050 f. 188b⁵-189a¹、無性釈玄奘訳㊤三二卷四四八上、同 Tib 訳 D 類 No. 4051 f. 294a¹⁻³)。転依に於ける四智と八識の関係については別な機会に譲るが、鏡智—阿頼耶識の関係は比較的古いと考えられるから、『摂大乘論』に基づけば、b 有義の様な特別な解釈を加えない限り鏡智—法身が成立してしまふであろう。しかし『莊嚴経論』と『摂大乘論』とは極めて密接な関係にあるから、この二論からこれ程まで決定的な差異を導くことは危険であり、むしろ鏡智と法身との関係がまだ明確でなかったと考える方が正確であろう。なお、先の『摂大乘論』世親釈真諦訳は c に当たる。

以上、述べて来た事から次の様な事を推知することができる。

(一)、インドでは五法と三身の関係は必ずしも明確でなく、全体として「理のみの法身」(図の b の系統)も含めた「理智不二の法身」(図の a と c の系統)を基調としていたと考えられ、そして不明確であるという点では、弥勒・無著・世親・無性等はこの傾向の中で捉えられること。

(二)、真諦は異質に見えるが、法身に智を含める点で理智不二の法身の系統に含められること。

(三)、安慧でこの関係が明示され、しかも a ↓ b の片鱗が窺えること
(四)、戒賢・Yeśasde・dPal brisegs は明確に a—1 を説いていること。

(五)、Prabhākaramitra は独特だが、理智不二法身であり、a に属すること。

(六)、玄奘訳である『成唯識論』『仏地経論』のみが b に属すること。
以上、要点のみを記した。(東京大学大学院)